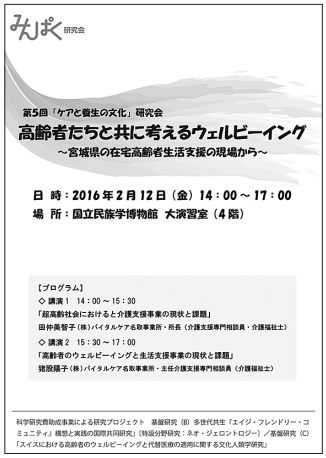
研究成果の公開──最近開催されたシンポジウム等から



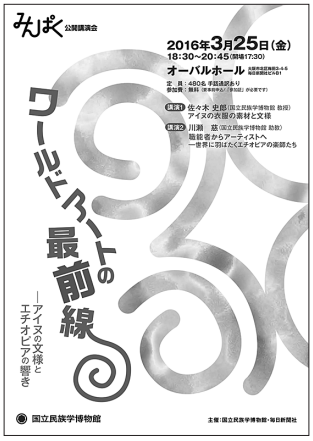
公開研究セミナー（第５回「ケアと養生の文化」研究会）
「高齢者たちと共に考えるウェルビーイング──宮城県の在宅高齢者生活支援の現場から」

日時：2016年２月12日（金）
場所：国立民族学博物館
主催：科学研究費助成事業基盤研究(B)（特設分野研究　ネオ・ジェロントロジー）「多世代共生『エイジ・フレンドリー・コミュニティ』構想と実践の国際共同研究」
協力：「ケアと養生の文化」研究会
企画：鈴木七美

本セミナーは、東日本大震災後、移動や変動の中で暮らす高齢者の生活支援に関して宮城県の現場実践者と続けてきた共同研究の成果の一つであり、高齢期のウェルビーイングに配慮した環境創出は、全ての人が充足して年を重ねる「エイジ･フレンドリー･コミュニティ」構想に繋がるという視点からのプロジェクトの一環である。本プロジェクトはこれまでも、震災直後に近隣住民の要請に基づき一時避難所を提供した企業の経験（国際シンポジウム 2012年２月民博）、介護保険制度に基づき高齢者の生活デザインを支援するケア・マネージャーの経験（IUAES シンポジウム 2014年５月 千葉）、在宅支援の現場（応用人類学会シンポジウム 2016年３月 バンクーバー）について発信してきた。本セミナーでは、震災後５年が経過し、より介護が必要な高齢者への支援が重点化される中、公助、共助、互助、自助の在り方と充実が課題となっていることが示された。介護支援事業に参画する企業や、阪神淡路大震災を経験した兵庫県の高校生等が、仮設住宅やデイケアでボランティア活動を展開する具体例が紹介され、多様な世代の人々の生活を豊かにする新たなインターディペンデント（相互依存）な関係を醸成する可能性も示唆された。

みんぱく公開講演会
「ワールドアートの最前線──アイヌの文様とエチオピアの響き」

日時：2016年３月25日（金）
場所：オーバルホール
主催：国立民族学博物館、毎日新聞社
企画：丹羽典生



ワールドアートとは、近年のアート（芸術）研究の流れのなかから生み出された言葉である。西洋中心的な芸術概念に偏重する傾向のあった従来の研究を反省し、批判的にとらえて、アートという枠組み自体を再考する人びとに使われている。そこでは、従来ではとてもアートとは考えられてこなかったものまで積極的に取り扱われるようになってきている。たとえば、人類学、考古学といった学問分野の研究対象となるようなものであったり、工芸、手芸など作品としての質の高さは認められながらも芸術品として扱われなかったようなさまざまな事物が対象に取り込まれている。本講演会では、現在のアート（芸術）の世界でどのような変化が起きているのか、その変化と現在の姿、さらには将来について、日本のアイヌの人々のデザインやアフリカのエチオピアの人々による音楽を対象に、ワールドアートの動向について紹介した。その後、アートという概念やその境界を問い直しながら、ワールドアート研究の将来について活発なディスカッションがなされた。

国立民族学博物館・金沢大学 研究フォーラム
「文化遺産の保存と活用──ミュージアムの視点から」

日時：2016年３月26日（土）
場所：国立民族学博物館
主催：国立民族学博物館、金沢大学

近年、世界各国で文化遺産の保存と活用が注目されている。経済を中心とするグローバル化の波の中で、各国や地域における特性の発見や利用が国民や地域としての統合や経済効果に結びつく点が認識されてきたことが大きな要因だが、じつはこうした国や地方自治体の思惑のみならず、民族運動、NGO 活動、学問の方向転換との関連をぬきにしては語れないほど、実態は複雑である。今回のフォーラムでは、文化遺産を展示してきたミュージアムに焦点を絞り、国民、地域住民、先住民、宗教団体との関係をテーマとしてとりあげた。このうち２本の発表はタイを対象としたもので、仏教寺院がミュージアムとして機能し地域コミュニティの核となっている事例と、世界遺産に登録された考古遺跡に隣接する国立博物館の活動と観光化された文化フェスティバルの関係を問う事例が紹介された。最後に当館が北米先住民ホピの人々とともに実施している館所蔵資料の分析と情報共有プロジェクト（フォーラム型情報ミュージアム）がとりあげられ、その後一般参加者を交えて活発な討議が行われた。